

③ がん薬物療法の副作用について

先述したように、がんの薬物療法では、がん細胞だけではなく、正常細胞に影響を及ぼし、さまざまな症状が出現します。これを「副作用」と言います。「副作用」と聞くと、不安になったり、怖いと思ったりするかも知れませんが、単に恐れていても治療に踏み出せません。そこでここでは、がんの薬物療法の副作用とはどのようなものかについて簡単にお伝えします。

がん薬物療法の副作用とは?



がん薬物療法の副作用には、脱毛や皮膚の発疹など、外見の変化に関わるもの、手足のしびれや痛み、視力低下など日常生活行動に影響を及ぼすもの、そして、こつすいよくせい骨髄抑制や肝機能障害など重症化すると命に関わるものなどがあります。

いずれも患者さんの生活の質（QOL）を低下させます。できるなら起こらない方がよいですが、残念ながら副作用を完全に防ぐことはできません。しかし、過度の心配はいりません。薬物療法を行ってきた経験から、安全に治療していく方法や注意していくポイントなどはわかっていますので、備えることも可能です。早めに対応することができれば、症状が出現した際に程度を軽くすることも可能になるでしょう。そのためには、患者さんも治療を受ける前にどのような副作用が出現する可能性があるのかなど、副作用について正しい知識を身につけることが必要です。

- 副作用は、使用する薬の種類によって異なります
- 副作用には、自覚できる症状とできない症状があります
- 早期発見、早期対応が大切です
- 症状の出現する時期は異なります
- 出現する症状や程度には個人差があります

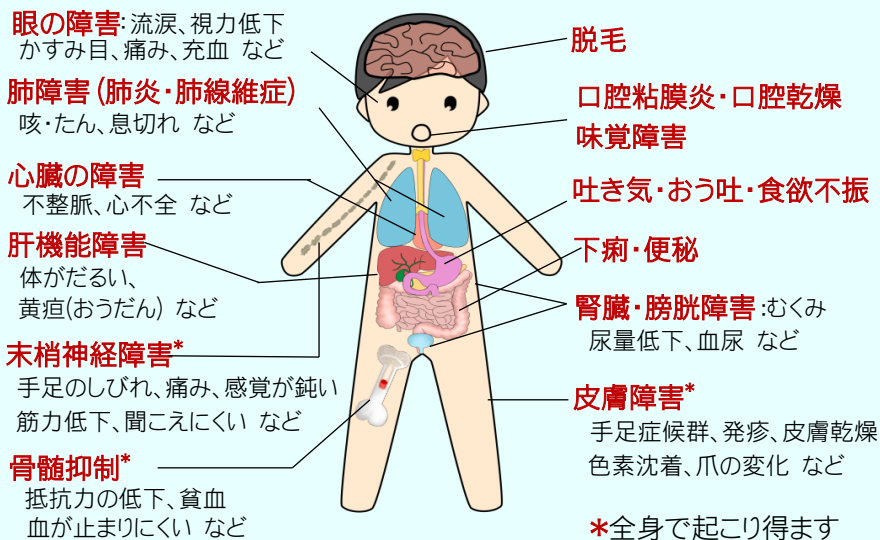


■ 使用する薬と副作用の種類と症状

一般的に抗がん剤の副作用と言いますと、「毛が抜ける」、「気持ち悪くなる」、「体の抵抗力が弱くなる」などが連想されると思いますが、全ての薬で同じ副作用が出現するわけではありません。また、薬によって出現しやすい副作用があります。なぜなら、抗がん剤にはいくつかの種類があり、それぞれがんを攻撃する方法(メカニズム)が異なるからです。ここでは、「細胞障害性の抗がん剤」^{さいぼうしょうがいせい}、「分子標的薬」^{ぶんしひょうてきやく}、「がん免疫治療薬」^{がんえんぎちりょうやく}、「ホルモン療法薬」について述べていきます。

● 細胞障害性の抗がん剤と主な副作用 ●

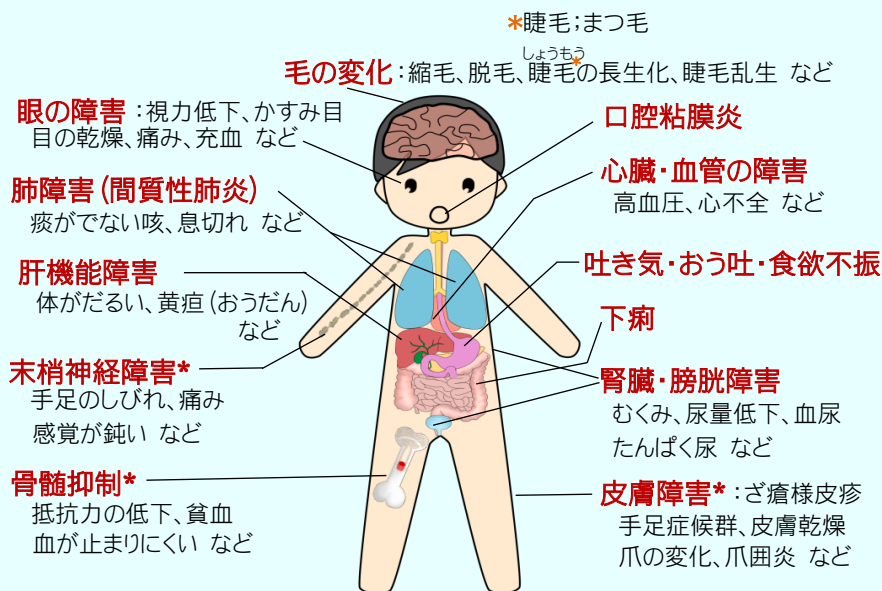
細胞障害性の抗がん剤は、細胞分裂が活発な細胞に作用します(4ページ参照)。従って正常細胞でも細胞分裂が盛んなところに障害が起こりやすくなります。主な副作用は、吐き気・おう吐^{こつすいよくせい}、骨髄抑制、脱毛、口腔粘膜炎症、下痢、便秘、肝機能障害、腎臓・膀胱障害、末梢神経障害などで、症状が出現する時期はある程度予測することができます。



《副作用の種類と症状(イメージ図)》

●分子標的薬と主な副作用●

分子標的薬は、薬の標的がピンポイントで決まっていますが、その標的はがん細胞だけではなく、正常細胞にも存在します。標的が決まっているので、薬の種類によって特徴的な副作用が出現します。主な副作用は、発熱、皮膚障害、肺障害、高血圧、肝機能障害、下痢などで、症状が出現する時期には個人差があります。



***全身で起こり得ます**

過敏症 (アレルギー反応): 発熱、息苦しい、脈が速い、血圧低下、蕁麻疹 など

《副作用の種類と症状 (イメージ図)》

●がん免疫治療薬と主な副作用①●

免疫治療薬は自分自身の免疫機能が過剰に働いて、自己免疫疾患のように、正常細胞も攻撃してしまうことがあります。主な副作用は、皮膚障害、肺障害、甲状腺機能障害などで、症状が出現する時期は予測困難です。

*羞明；異常にまぶしく感じる状態

毛髪の変化：白髪

脳炎・髄膜炎：頭痛、首の硬直、意識障害 など

眼の障害：羞明^{しゆうめい}、かすみ目
視力低下、目の痛み など

**下垂体炎・
下垂体機能低下症**

体がだるい、低体温
無月経、血圧が低い など

肺障害 (間質性肺炎)
痰がでない咳、息切れ など

口腔粘膜炎

心臓の障害：不整脈、めまい
動悸、胸の痛み など

甲状腺機能障害

疲れやすい、体がだるい
体重の増減 など

肝機能障害
体がだるい、黄疸(おうだん)
白色便 など

糖尿病：のどが渇く
尿量が増える、体重減少
体がだるい など

大腸炎：持続する下痢
腹痛、粘液便、血便 など

腎障害：尿量低下、むくみ
血尿 など

皮膚障害*
発疹、かゆみ、白斑 など

副腎障害：体がだるい
脱力感、食欲不振
吐き気・おう吐 など

*全身で起こり得ます

過敏症 (アレルギー反応)：発熱、息苦しい、脈が速い、血圧低下、蕁麻疹 など

静脈血栓塞栓症：むくみ、腫れ、皮膚や爪変色、痛み、息苦しい など

免疫性血小板減少性紫斑病：皮下出血、鼻血が出る、歯ぐきからの出血 など

重症筋無力症・筋炎：まぶたが重い、物が二重にみえる、筋力低下、筋肉痛 など

神経障害：手足のしびれ、痛み、知覚低下、運動のまひ など

《副作用の種類と症状 (イメージ図)》

めんえきちりょうやく
●がん免疫治療薬と主な副作用②●

免疫治療薬の治療で、重篤な副作用が出現する頻度は低いですが、新しい治療法なので、どのような症状に注意が必要か、具体的に挙げます。下記の表で赤字になっている症状がある時は、かかりつけの病院に電話相談しましょう。

	症状・状態
意識・全身の症状	ボーっとして、集中力が落ちた感じがある、眠気が強い
	動悸やめまい、ふらつきがある(手足のふるえ)
	だるさを強く感じる、 だるくて動けない、筋肉痛が続いており、だんだん強くなっている
呼吸の症状	明らかに咳が増えた、息切れを強く感じる、発熱がある
	安静時も息が苦しい
お腹の症状	下痢(水様便)が続いている(1日7回以上)、ふらふらする
	下痢で 腹痛や便の色(血性)に変化がある
高血糖の症状	異常にのどが渇く、多飲、多尿である、 ボーっとしている状態が続いている
皮膚・粘膜の症状	皮膚に 発疹が広範囲にある 、目が充血している、 口腔粘膜炎でがまんできない痛みがある 、発熱がある

●ホルモン療法薬と主な副作用●

ホルモンの生成や分泌が抑えられるので、更年期障害(ほてりやのぼせ、こつそしょうしょう骨粗鬆症など)、肝機能障害(だるさ、黄疸など)、ぼっき勃起不全などが主な副作用で、症状の出現時期や程度は個人差があります。



■ 自覚できる症状とできない症状、早期発見・早期対応について

副作用には、患者さんが自覚できる症状と自覚できない症状があります。例えば、骨髄抑制や肝臓、腎臓の機能低下などは患者さんが自覚できない症状で、重篤になると生命の危険を招く可能性があります。そのため定期的に血液検査等をして、患者さんの体の状態を確認します。

また、患者さんが自覚していても、見た目でわからない症状は医療者が把握しにくい場合もあります。例えば、視力低下や手足のしびれなどです。これらの症状は、放置していると回復が難しくなる場合もあります。

このように副作用には、命に関わったり、機能の回復が難しくなったりする場合もありますので、気になる症状がありましたら、がまんをしないで医療者に伝えてください。早期に対応して重症化を防ぐようにしましょう。

■ 症状が出現する時期

副作用は、全てが出現するのではなく、また症状によって出現する時期が異なります。治療当日から2日以内の早期や週単位、月単位のものもあります。

細胞障害性の抗がん剤では、今までの経験からどの時期にどのような症状が出やすいか、だいたいわかっています（下記の表参照）。

出現時期（目安）	主な副作用の症状
治療当日	過敏症、吐き気・おう吐、血管痛 など
2日～1週間位	吐き気・おう吐、食欲不振、だるい、便秘 など
1週間～2週間位	口腔粘膜炎、下痢、だるい、食欲不振、抵抗力の低下、出血しやすくなる など
2週間以降	脱毛、手足のしびれ、貧血 など

一方で、分子標的薬や免疫治療薬では、出現する症状はだいたいわかっていますが、出現時期については個人差があり、一概には言えません。

なお、副作用の症状は、一つひとつ出現するわけではなく、複数の症状が重なったり、連続して出現したりしますので、一人で頑張るのではなく、必要に応じて周りの人に助けを求めるようにしましょう。

■ 発症頻度について

薬の添付資料を見ると、副作用の発症頻度が記載されています。これは発現しやすい、しにくいという目安にはなりますが、「必ず」というものではありません。個人差があります。

■ 個人差について

同じ種類の薬を使用しても、副作用の症状や程度は患者さんによって異なります。それは、患者さんの内臓や骨髄の機能などによって反応が異なるからです。個人差がありますので、人と比べる必要はありません。

■ 副作用の評価

薬物療法の副作用によっては、治療の休止や中止、あるいは治療薬を変更せざるを得ない場合があります。その評価の基準となるものが、「有害事象 共通用語規準v5.0 日本語訳 JCOG 版(2024 年 12 月現在)」です。これは副作用の重症度をグレード1から5までの段階にわけたものです。簡単に説明しますと、数字が大きいほど重症度が高く、グレード3の評価になると薬の減量や休止を検討するなど、治療に影響が及びます。ゆえに、副作用を上手にコントロールすることは、薬物療法の継続と治療効果を最大限高めるために重要です。

患者さんから「飲み薬だから副作用は軽いのでしょうか?」と聞かれることがあります。「飲み薬だから副作用が軽い」ということはありませんので、注意しましょう。



がん薬物療法中の排泄物(尿や便)、吐物などの処理について

患者さんの体内に入った抗がん剤は、尿や便の中に排泄され体外にでます。そのため、患者さんの排泄物(尿や便など)から抗がん剤が検出される可能性もありますので、ここでは排泄物(尿や便など)の処理について、どのようにしたらよいかについて簡単に説明します。ただし、患者さんやご家族が排泄物(尿や便)や吐物などに触れて、何かの悪影響があったという具体的な報告は現在(2024年12月)のところありませんので、過剰に神経質になる必要はないでしょう。

- 予防する期間は、点滴の場合は、投与終了日から2日間で、内服薬の場合は、服用している期間と最後に服用した日から2日間です
- 排泄物(尿や便)や吐物を片付ける時などは、使い捨て手袋などをして直接触れないようにしましょう
- 排泄物(尿や便)や吐物が飛び散った場合は、トイレットペーパーなど、使い捨てできるもので拭き取り、処分しましょう
- 触れた場合は、石けんを使って十分に手を洗いましょう
- 点滴を外した時や排泄物(尿や便)、吐物を片付けた後には、直接触れていなくても、石けんを使って十分に手を洗いましょう
- 男性の患者さんは、排尿する時に洋式便器であれば、座って行くと、尿が便器の周囲に飛び散るのを防げます

